

「言わんばかり」考 — 国語辞典類の意味記述をめぐって —

小林賢次

一、はじめに

① どうだ、と言わんばかりの態度。

② 泣かんばかりに頼む。

右のような「動詞未然形＋ン＋バカリ」（以下、「ンバカリ」と示す）の形式による表現に関して、「ン」が推量の助動詞「ム」の音変化形であるのか、あるいは打消の助動詞「ヌ」の音変化形であるのかが問題となる。その解釈のいかんによって当該の表現の意味も異なることになり、従来から二つの解釈がなされてきている（注1）。筆者は、この表現形式の成立と展開について史的観点から考察し、もともと「ン」は打消の「ヌ」に由来するものであるという結論を得ている（注2）。「ン」を推量のように解するのは、本来は類推にもとづく転用、あるいは誤用とみるべきものである。その史的考察は別稿に譲り、ここでは、現在一般にこの「ンバカリ」がどのように理解されているか、国語辞典類の記述を取り上げて検討することにする。

二、国語辞典類における「ンバカリ」の記述

国語辞典類において、「バカリ」の項などで、この「ンバカリ」がどのように説明されているか、次に示す。「ン」を推量と解する立場、打消と解する立場の二つがあり、中にはその両方の系列を区別してとらえようとする立場もあって、実にさまざまなのである。

【I 「ン」を推量とみている（と判断される）もの】

A 『福武国語辞典』（一九八九）「ばかり」……③動作が始まる寸前であることを示す。「今にも泣かんばかりだ」（傍線、傍点筆者。以下同様）

B 『新明解国語辞典（第四版）』（一九九一。三省堂）「ばかり」……③大体その程度であることを表わす。「コップに半分—の水・泣かん—に頼む……と言わん—である」「「いわん」……—とばかりである」「「うっかりすると……—と言いかねない状態だ」

C 『現代国語例解辞典（第二版）』（一九九三。小学館）「んばかり」……活用語の未然形について「今にもつかみかからんばかりの形相でにらみつける」のように

動作や状態が起きる寸前であることを示す。▽(1)推量の助動詞「ん」に副助詞「ばかり」のついたもの。

- D 『学研現代新国語辞典』(一九九四)「ばかり」……⑥〔動詞連体形＋「ばかりだ」や、動詞未然形＋「んばかりだ」「ぬ(ない)ばかりだ」などの形で〕いまにも…しようとする状態にある意、また、…していると言ってもいい状態にある意を表す。「用意は済んで、今しも出かけるばかりになっている」「触れなば落ちんばかりの風情」「五位は、殆どべそを掻かないばかりになって、眩いた(龍之介)「燃えるばかりに(＝ように)咲き誇る」「参考」「ぬ」「ない」に続く形は、推量の助動詞「む(ん)」を打ち消しの助動詞「ぬ」「ない」と誤解して成立したものの。〈「いわん―許(かり)」「句(と)―」の形で〉口にごそださないが、口に出して言ったのと同様であるようす。「盗んだ」と―の物腰でつめよる」
- E 森田良行『基礎日本語辞典』(一九八九。角川書店)「ばかり」……「雲つくばかりの大男」「泣かんばかりに頼む」「いやだと言わんばかりの顔」「今だとばかり逃げ出した」「いずれも状況を、いかにも…のように」と例示・比喩によって表し、「恐らくそれと近い状況・有様だ」と推測的に婉曲に述べている。

Ⅱ 「ん」を打消とみるもの

- F 『日本国語大辞典』(一九七六。小学館)「ばかり」……〔補注〕(7)「何を愚頭々々してゐると云はぬばかりに」〔浮雲―三・一九〕や「そんな勇氣はないと云はん許(ばかり)の顔をしている」〔吾輩は猫である―〕のような、打消の助動詞「ぬ(ん)」をうけた例は、「今にも…しそ(う)に」の意を表わすが、「表面…しないで」けで実質的には…したも同じ」という意味から出たものであって②(筆者注、限定の意)の用法ということが出来る。

- G 『広辞林(第六版)』(一九八三。三省堂)「ばかり」……③「いまにも…しようとする状態にある意を表わす。」「んばかり」の形で用いることが多い。「運びだす―になっている」「泣かん―の顔で頼む」(…③の「んばかり」は「ぬばかり」の形も用いられ、この「ん(ぬ)」は、打消の助動詞の連体形とみられている)

- H 『岩波国語辞典(第四版)』(一九八六)「ばかり」……①(ハ)〈動詞(十助動詞)に付く〉(まだしないが)するのと同程度にまでなっている、あとは…するだけだの意を表す。「出発する―のところに邪魔がはいった」「飛び上がらん―の驚きよう」

- I 『使い方の分かる類語例解辞典』(一九九四。小学館)……「んばかり(に)」「喜

びのあまり今にも跳び上がらんばかりだった」「店の主人に、帰れと言わんばかりの目つきをされた」(用例二例、略)……(2)「んばかり(に)」「ん」は打消で、実際にはその動作・作用は起こらないが、今まさにしてると言ってもいいぐらいに……、という意味になり、非常に似た状況を説明するための比喩的な役割を果している。

【Ⅲ 「ン」に推量と打消の二系列を認めるもの】

- J 『三省堂国語辞典(第四版)』(一九九二)「ばかり」……④「今にも……しそうである」の気持ちをあらわす。「泣かん・(泣かぬ)——にたのむ」……⑥「……しなだけで、実はするのと同じ」の気持ちをあらわす。「いやだと言わん——の顔で」
K 『講談社国語辞典(第二版)』(一九九二)「ばかり」……⑤「ん(ぬ)——」の形で「今にも……しそうだ」の意を表す。「狂わん——に泣きさげぶ」⑥「それをしなだけで本当はするのと同様の」の意を表す。「反対だと言わん——の態度」
L 『旺文社国語辞典(第八版)』(一九九二)「ばかり」……④「……んばかり」の形で「(ア)「ん」は打消しの意で」……ないだけ。「笑わん——の言い方」(イ)「ん」は推量の意で)……しそうな。「泣き出さん——の顔」

【Ⅳ 立場の明確でないもの】

- M 『大辞林』(一九八八。三省堂)「ばかり」……②物事の程度を表す。……(エ)ある動作がすぐにも実行される段階にあることを表す。「出かける——のところへ人が来た」「泣きださん——の顔」「御衣の御後引きつくろひなど、御沓を取らぬ——にし給ふ／源紅葉賀」「言わんばかり」「言う」の子見出し)……はつきりとそうは言っていないが、そう言っているような様子であること。「帰れと——の応対をされる」

- N 『学研国語大辞典(第二版)』(一九九〇)「ばかり」……③「瞬間的な動作・作用を表す動詞・助動詞につく。多くは「ばかりに」「ばかりの」の形で」(イ)いままさに……しようとする状態、あるいは、……していると書いてもいい状態にあることを示す。「五位は、殆どべそを掻かないばかりになって、呟いた(芥川・辛鬱)」
「冬の真夜中で大儀そうな老医に八重は泣きついて何度も頭をさげ、手をひかんばんかりにして連れて来た(壺井・暦)」「斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている(太宰・走れ……)」
「いわん——ばかり」(連語)ことばでは言わないが、あきらかにそれとさしているようす。「仏外交記者はお手上

げだど―に肩をすくめる(四三・五・九・読売夕)

〇『集英社国語辞典』(一九九三)「ばかり」……③ある状態にある意を表す。(ア)いつでもできる状態にある意、今にもそのようにしそうな状態にある意を表す。

「…ん(ぬ)ばかり」の形を用いることも多い。この状態の表現は、修飾の語法にたつと、時に、ある迫った程度(①)(筆者注、程度の意)の表現と解することもできる。「帰る―になつてゐる」「泣き出さん―にかき口説く」「腰を抜かす―の驚き」(イ)(引用の格助詞「と」に下接して)あるきっかけがあつて、ことばでただちに言わないが、ほとんど言うも同然、態度や行動でそれを示す意。ほとんど…と言ひそうな。…と言わぬばかり。「風の音が胸を揺する泣けと―に」「待つてましたと―声をかけて」「いわんばかり」「連語」……ことばでは言わないが、明らかにそれと指している様子。「まるで全部一人でやつたと―」

それぞれの版は、できるだけ最新のものを示すように心掛けたが、版による記述の相違については特に問題としない。要するに現代において、この「ん(ぬ)ばかり」の解釈がいかにゆれているか、その状況を示したものである。「ばかり」の項を主とし、「イワンばかり」の項目が立てられているのはへ―内に示した。いわゆる国語辞典以外のものも、それに準じるものとして取り上げた場合がある。出版社名は、書名から判断できるものは省略に従つた。編者名も省略。この稿の筆者自身が編集委員として参画しているものもあるが、同列に扱つた。なお、引用にあつて、記号など表記を改めた場合がある。

三、解説文・用例の検討

以上、諸辞典の解説は、「ん」の解釈について立場の明確でないIVを除くと、大きく三つに分かれている。なお、へ―今にも…しそうな様子を表す」といった簡単な記述のみのもの、また、この項目に関して特に言及のないもの(『広辞苑(第四版)』など)は引用を省略した。以下、記述内容を整理し、問題点について検討していくことにする。ただし、これはあくまでも当該項目に関してのことであり、特定の辞典の批判を意図するものでないことは言うまでもない。この意味もあつて、以下A―Oの記号を用いる。

I

まず、「ん」を推量とみて、「んばかり」をへ―しそうなほど)のような意味にとるものについて、見てみよう。Aの場合、明示的には述べられていないが、用例に「今

にも…んばかり」とあり、この場合、「今にも」がまさに実現しようとする状況であることを示し、〈今にも…しなだけ〉という否定的な意味にはなりがたいので、「ン」を推量と捉えていることになるであろう。また、Bの場合、〈大体その程度…〉という記述から「ン」を推量ととらえているものと判断される。Bには「いわん」の項があり、「…と—ばかりである」が用例として掲出されているが、〈うっかりすると…と言いかねない状態だ〉という説明は、「ン」を打消ととっているのであろうか。苦心の説明ではあるが、その立場は必ずしも明確ではない。

これに対して、Cは「ン」が推量の助動詞であると明記し、用例に「今にも…んばかり」の呼応例を挙げている。ただし、「言わんばかり」についての言及はない。また、Dの場合、〈ぬ」「ない」に続く形は、推量の助動詞「む(ん)」を打ち消しの助動詞「ぬ」「ない」と誤解して成立したもの〉という踏み込んだ記述をしていて注目される。Dには「触れなば落ちんばかりの風情」の例が挙げられていて、これはたしかに推量「ン」の例となるが(注3)、この点については後述する。なお、Dの場合も「言わんばかり」の項においては〈口にこそださないが…〉という記述で、「ン」を打消とみていることが知られる。「ばかり」の項との関係が問題となるところであろう。Eは「泣かんばかりに頼む」も「いやだと言わんばかりの顔」も挙げており、明示的には示されていないが、「ン」を推量とみているものと思われる。

II

これに対して、F—Iは「ン」を打消の助動詞として扱い、「ばかり」を限定の意にとつて、〈…しなだけで、実際は…したも同様〉の意味に解釈するものである。Fの補注欄における説明は、Dなどとは語源的に対立したものとなっている。特にFにおいて、〈今にも…しそうに〉という現在の一般的な受け取り方を示し、そのもととなる意味を、打消の「ヌ(ン)」に「ばかり」が接続したものという立場から、「バカリ」の限定的な用法と説いている点が注目される。Fには「言う」の子見出しとして「いわぬばかり」の項目があり、虎寛本狂言「柿山伏」などの例が挙げられている(すでに『大日本国語辞典』にこの項目があり、〈口に出して言はぬだけで、実際は明かにそれと示してゐること〉という記述がある)。「…ヌばかり」の形式を本来のものと考えらば、「…ンばかり」も当然〈…しなだけ〉という打消の立場から解釈することになる。筆者の立場もこれに近いが、ただし、Fで示している用例は「…と言わぬ(ん)ばかり」に限られており、「泣かんばかり」などの例の考察を欠いている点が問題であろう。

Ⅲ

次に、J・K・Lは、「ンバカリ」に相当する語釈を二つのブランチに分けて示しているものである。特にLにおいては、〈打消しの意〉(「笑わん—の言い方」と〈推量の意〉(「泣き出さん—の顔」とを明示して区別して注目される。JやKの場合も、〈今にも…しそう〉という意味の場合と、〈…しないだけで、するのと同様〉の意味を表すものとを別ブランチに立てており、同様の判断をしているものとみられる。J・Kは、ともに「…と言わんばかり」の例を挙げており、この場合は「ン」を打消とみる点で一致している。ただし、推量としての説明の中で、Jでは「泣かん(泣かぬ)ばかりに」という用例で、Kでは〈ん(ぬ)ばかり〉の形で」という注記で、それぞれ「ヌバカリ」の語形を挙げているが、この場合「ヌ」は打消とせざるをえないから、上述のような扱い方にはやや問題があるであろう。

Ⅳ

MやNの場合、「バカリ」の項の記述自体は「ン」を推量として扱っているようである。しかし、用例に「ヌバカリ」や「ナイバカリ」の接続例を挙げている点は、解説文の記述と異なるものとなっている。たとえばNにおいて、〈瞬間的な動作・作用を表す動詞・助動詞につく〉としながら、「ベそを搔かないばかり」のような用例を挙げているのは矛盾しており、このような「…ナイバカリ」の例まで〈いままさに…しようとする状態〉のような解釈をあてはめるのは無理であろう。なお、M・Nともに「言わんばかり」の項の記述になると、明らかに打消の観点からなされているのである。

Oの場合も、その記述にわかりにくいところがあるが、③の(A)は「ン」を推量と解しているとみてよいであろう(イ)は語釈の中に「…と言わぬばかり」の例を示して注意されるが、これは「…とばかり」の用法であり、別に考えるべきものである)。一方、「いわんばかり」の項では「ン」を打消とみる立場から記述している。このような点からすれば、M~Oの場合もⅢの立場とみてよいのかもしれない。

以上、諸辞典における「ンバカリ」の記述をみてきたが、その語源(というよりも語構成)の把握、また、それによる意味解釈がこれほどまちまちな項目というのも珍しいように思われる。この「ンバカリ」の形式は、現在でもしばしば目にし、耳にするところであるが、「…ンバカリ」全体が慣用的な用法となつて、「ン」そのものの意味が把握されにくくなり、それぞれの辞典の執筆者(編者)が分析的な意識で記述し

ようにするとき、その解釈にゆれが生じている段階なのであろう。

この稿の筆者は、冒頭にも述べたように、この「ンバカリ」の形式は、「打消の助動詞又バカリ」に由来するもので、一元的に説明できると考えている。具体的な用例の検討は別稿に譲らざるをえないが、「…ト言ハヌバカリ」のような例は室町時代から見えはじめており、江戸時代においては、前期上方語において、すでに盛んに用いられるようになってきているのである。この表現は「ヌバカリ」から「ンバカリ」への変化として、一般的にとらえられる。ただし、現代においては、その動詞の種類によって、次第に（今にも…しそうな状態で）という意味に解釈されだし（「泣きださんばかり」「飛び上がらんばかり（の驚きよう）」のような瞬間動詞の場合である）、「今にも」と共起する用法が生じてきたのであろう。

前述の「触れなば落ちんばかりの風情」（Dの用例）は、「触れなば落ちん（＝む）風情」という連体修飾の用法が本来のものであったと思われる。仮定条件の帰結においては「ム（ン）」をとるのが普通であり、この場合それが連体法に用いられたものとみることができよう。現在、Dの拳例のように「触れなば落ちんばかり…」の形でも用いられるとすれば、それは「落ちんばかり」という「ンバカリ」の用法に影響されたものである。この例に関しては、「触れなば落ちん風情」の用法と、打消の「ンバカリ」とのコンタミネーションとして説明すべきものと思われる。

四、おわりに

以上を整理してみよう。冒頭の

① どうだ、と言わんばかりの態度。

② 泣かんばかりに頼む。

において、①は「いわんばかり」の形を見出し語に立てているものも多く、この場合は、諸辞典においてほぼ共通して〈…と言わないだけで、まるで言ったも同様に〉という意味に解釈している。すなわち、「…と言わんばかり」の表現に限るならば、「ン」を打消とみるのが一般的であり、「言わぬばかり」という語源意識は現代にまで継承されていると考えられる。

一方、②の場合、①と同様に解釈するものと、「ン」を推量とみるものとに分かれている。たしかに、現在では、

○ 今にも泣かんばかりに頼む。

のような用法が可能であり、「ンバカリ」を推量のように意識することが多くなってきたようである。ただし、その語源、本来の用法ということになれば、①と区別

すべき理由はなく、打消の「ヌ」に由来するものとして、一元的にとらえられるのである。

注

(1) 湯沢幸吉郎氏は前者の立場に立ち、「ムバカリ」を本来のものとする考えを提出している(『現代語法の諸問題』一九四四、日本語教育振興会。一九八〇、勉誠社復刊)。これに対して此島正年氏は、後者の立場で、「ヌバカリ」を本来のものとして推定している(『助詞』のみ)と『ばかり』の通時的考察(『日本文学研究』二四。一九六五。『国語助詞の研究』〈桜楓社〉所収)。

(2) 小林賢次「『言わ』んばかり」考——助動詞「ム」と「ヌ」の音変化による同音衝突——(『近代語研究会第一〇八回研究発表会、於北海道大学。一九九三・一〇・二九』)

(3) この表現については、口頭発表(注2所掲)の際、菊地康人氏から、「ン」が推量に解釈される場合のひとつとして指摘があった。なお、関連する表現について、田中章夫氏、金沢裕之氏などからの示唆もあった。

(こばやし けんじ・東京都立大学教授)